

前に進むために



仲良しのクラスメートと一緒に

皆さんは、人生の壁を経験したことはありますか。
今回は、壁と向き合い、周囲の人たちと前向きに歩む、一人の女性を紹介します。

はじける笑顔がチャームポイントの鈴木麻衣さん（18歳）。現在、県立川越高校定時制の3年生。学校では生徒会長を務めています。

2歳のときに原因不明の感音性難聴という病気で、右耳の聴力を失い、左耳でわずかに聞こえる状態になりました。小学校入学のころは、音が聞こえないショックから、動揺を抑え切れず、周りに当たり散らすことがありました。そんな鈴木さんは、学年が上がるにつれ、いじめの対象にされてしまいました。

中学生のときは、人と話すことに恐怖を感じたこともありました。進路を決める時期になり、進学をあきらめかけて



夢を語る鈴木さん

いたところ、中学2年生のときに担任だった先生から、一通の手紙が届きました。「あなたに合う学校がきっとあるから、前向きに考えて進んでほしい」と書かれました。鈴木さんは高校への進学を心に決めたのです。今でも先生とは、年賀状やメールのやり取りが続いています。

高校に進学後、耳のことは、数人の友人以外、ナイシヨにしていました。後ろから話しかけられる



文部科学大臣賞を受賞

と返事ができないので、無視していると思われれることも……。たくさんの方ができ、仲良くなればなるほど、誤解されることも嫌になつてきました。そこで、勇気を出し、自分

のこと、今までの経験を生活体験発表会で、全校生徒の前で話すことにしました。この内容を「全国高校定時制通信制生徒生活体験発表会」でも発表したところ、最優秀賞の文部科学大臣賞を受賞しました。病気のことを知ったクラスメートは、最初は戸惑いがあったようですが、やさしく受け入れてくれました。どんなときも明るく励ましてくれる仲間が、鈴木さんの元気の源になっています。

昨年4月、担当の医師から、聴力が失われるかもしれないと告げられました。「そろそろ覚悟したほうがいいですね」。その瞬間、頭の中が真っ白になりました。しかし、「いつも先生や友人に助けられているばかりの自分ではない」と決心。相手の唇の動きを読み、言葉を理解する「口話法」を学ぶことを決めました。初めは、まったく読み取ることができず、とても苦労しました。今では、友達と楽しく語り合えるほどに上達しています。

「これからは、自分が誰かの支えになります。卒業後は、医療福祉の道に進み、人の役に立つ仕事をしてみたいと思います」。鈴木さんは、はじける笑顔で夢を話してくれました。

アートを通じた市民交流



2月21日まで、市立美術館で開催された「なかさつない中札内村絵画展」。絵画展では、北海道中札内村で2年に一度開催される「北の大地ビエンナーレ」入賞作品のほか、同村の小中学生、市内の絵画同好会などが描いた作品54点を展示。ビエンナーレは、友好都市である同村が、新しい芸術・文化の発信を目的に開催したもので、全国から1,000点を超える応募がありました。絵画展に鑑賞に訪れた人も、豊かな自然や、人々の生活などを描いた作品から、雄大で厳しい北の大地を感じていたようです。

メダルを持って帰りたい

バンクーバー冬季パラリンピック、アイススレッジホッケーの日本代表で、開会式では日本選手団の旗手を務める遠藤隆行選手(川越市職員)。2月3日、川合善明川越市長に大会出場の報告をしました。遠藤選手は生まれつき両足に障害があります。車いすで生活しています。同競技は、大学のときに友人から誘われ、始めたのがきっかけ。ルールは、アイスホッケーに似ていて、「スレッジ」と呼ばれるそりに乗ってプレーします。遠藤選手が「メダルを持って帰りたい」と抱負を述べると、「市の誇りです。頑張ってください」と川合市長がエールを送りました。



腹式呼吸で健康づくり！



33人が参加しました

2月21日、スポーツ吹矢大会がオアシス体育館で行われました。競技は、1.2mの筒に込めた矢を、6m先の的めがけ放ちます。息を吹き込むときの「シュッ」という音が会場に響きます。軽い矢を的に命中させるには、集中力はもちろん、息を吐き出す力強い腹式呼吸が必要です。何度も繰り返し練習するうちに、自然と体が健康になるそうです。「初めて参加しました。的の中心に当てるのが難しいですね。健康のために次回も参加したいです」と加畑初雄さん(72歳・平塚)

「ささえあい」の第一歩

介護施設に集まった、20歳から60歳代までの男女20人。介護の仕事をしている人たちから話を聞き、体験する、介護の仕事入門講座が行われました。「介護の仕事は温かみのある仕事、利用者の目線でのサービスが大事」と施設の職員。高齢化が進むなか、介護に関係する仕事の需要は多い一方で、仕事に就く人が少ないのが実情です。参加した皆さんは、実際にどのような仕事なのか、資格は必要なのかなどを質問し、熱心にメモをとっていました。「介護の仕事について理解が深まりました。仕事に就けるように勉強していきます」と鈴木真弓さん(南大塚)。最後に、施設を利用している皆さんと触れ合う時間を体験。みんなの笑顔が印象的でした。



自然と笑顔がこぼれます